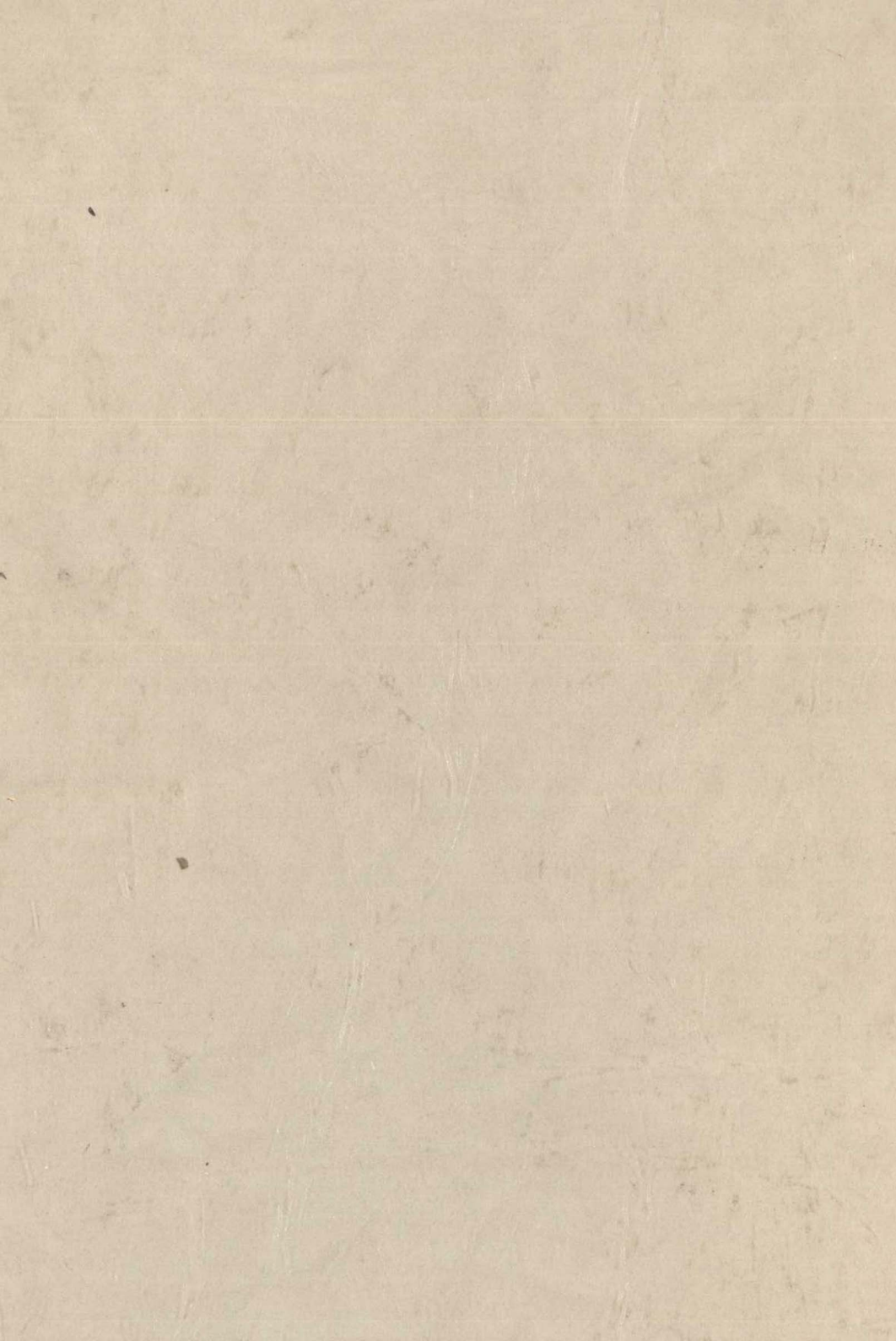




堀川東入ル

澤野久雄自選短篇集

堀川東入ル／昭和五十三年
六月十五日初版発行／著者
澤野久雄／装幀折久美子
発行人戀塚稔／印字あん企
画／印刷製本大東印刷工業
発行所エポナ出版株式会社

〒162／東京都新宿区岩戸町二六神楽坂セントラルビル
電話東京03二六九一二五一三／振替東京七三三四三七一

0095-00018-0673 ©1978 HISAO SAWANO

堀川東入ル

澤野久雄

装幀 枡折久美子

写真 井上博道

目次

夜の河……………七

五條坂……………五

晩年の石……………一〇三

雙面……………一七

京の影……………二五

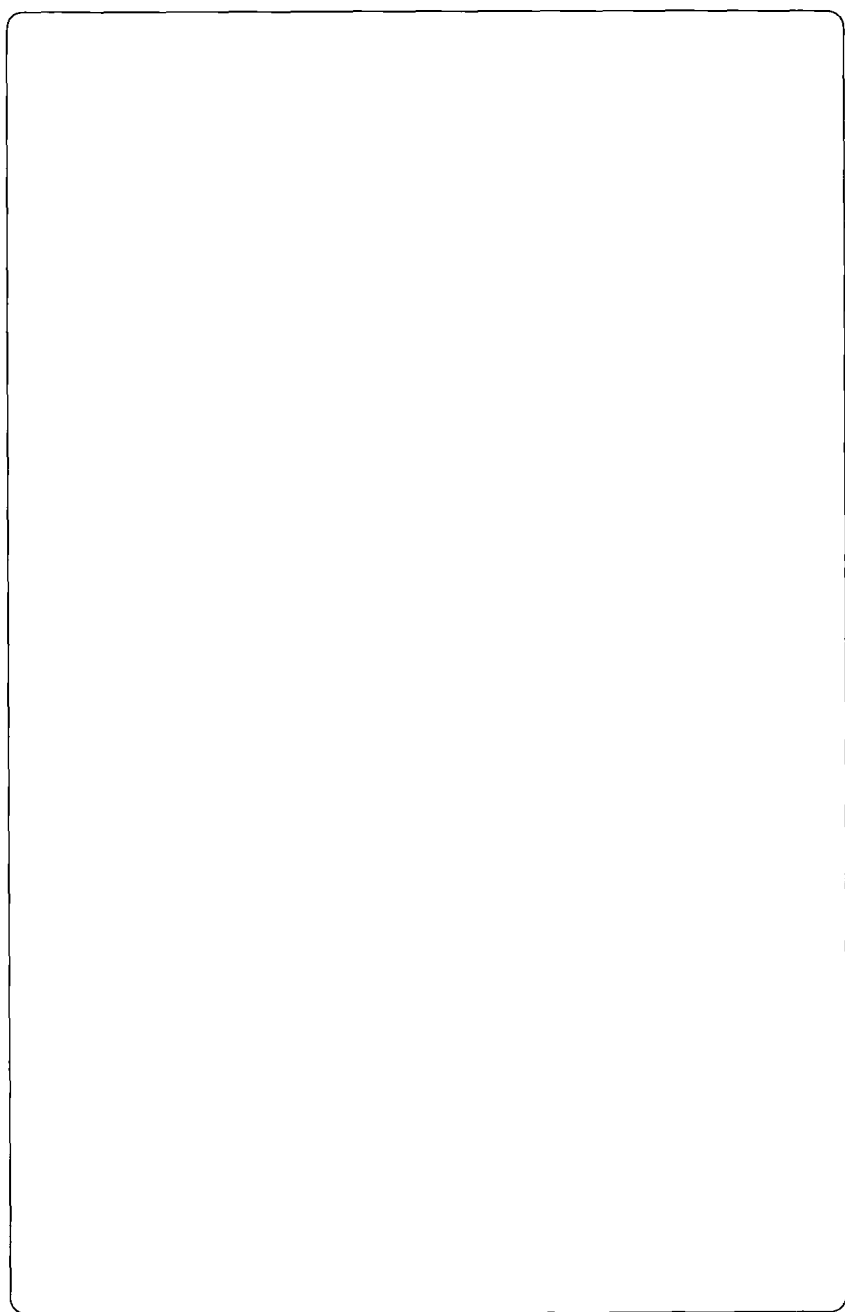
正倉院の藍……………二七

花と雪……………三九

回轉木馬……………六三

遠い音……………六五

あとがき……………三八



夜の
河

1

中京なかぎょうといつても、姉小路あねこうじから御池おいけにかけて、それも堀川の東一帯の地域は、京都市内でも、一般の旅行者からは「閉ざされた一郭」である。そこには、お上りさんの眼を瞞ごまからせるような歓楽街もなければ、その道の通人に京都らしさを味わわせる粋な町もない。広くもない通りを挟んで整然と並んでいるのは、一見しもたや風な古い家ばかり。紅殻べにがらを塗つた千本格子と、軒燈や出入口の硝子戸に書かれた五とか、金とかいうような屋号は、誰の眼にもつくだろう。が、ある家の三尺の表戸がいつばいに開け放されていても、そこに一つとして、商品らしいものを見掛けることは出来ないのだ。土間の奥は、厨に続く道を古めかしい暖簾のれんで区切つてあり、右か左に座敷はあるのだが、人目を惹くような物は、何も置かれていないのが普通である。

初めてこの町に足を踏み入れた人には、軒並、何を生業としてゐる家か分らないのも無理はないだろう。が、もし偶然にもこれらの家を裏側から眺める機会があれば、あ、と忽たちまち背うづくにちがいない。どの家の裏にも二階に高い乾し場があつて、晴れた日でありさえすれば、何十反という反物が風に揺れているのが見える。

静かな街である。けれども、あの「京染」というものが、京都の一つの象徴とも言えるなら、この一角こそ京都市の心臓だと言つても間違ひはないであらう。古い職人町。勿論、八百屋もあれば、煙草屋もある。が、この辺り一帯は染物屋を大部分に、たまには下駄屋、桶屋などを交えて、生粋の職人ばかり住んでいる。手描友禅では俺こそ名人だ、と思つてゐる老人がゐるかと思えば、自分が型を置けば一厘の狂いもないと、自信を持つてゐる型染職人がゐる。戦争中からつい先ごろまで、染料の使用制限に縛られて、住人たちは一応不自由そうな表情を見せてはいたが、しかも不思議に、時代離れのした落ちついた風情もどこかに揺曳してゐるのであつた。

屋号「丸由」(軒燈には、丸の中に「由」の字が書かれている)を名乗る舟木由次郎の店も、この町の一角にあつた。子供のころ、山城の田舎から出て来て老舗しんせに奉公し、暖簾を分けてもらつて店を持つたのは、三十年も昔のことだ。すでに仕事を仕上げた人の風貌である。

小柄で、丸刈りの頭はすっかり白くなつてしまつてゐるが、肉付きはいい。暇な時は中庭に面した座敷で、若い女房の淹れる茶を啜りながら、濡れ縁の先に繁る胡麻竹ごまたけに閃く陽の色などに、そつと見入つてゐる。優しい眼である。が、仕事場に立つと、自然、氣負つ

た職人らしい気魄が眉の辺りに流れるのは、この辺りに住む人に共通した表情であつた。けれども、あの戦争がすんで以来、彼には今までと異つた点も少しは現れて来ている。

時々体のどこかを、為体の知れぬ虫にでも噛まれているような、いらいらした表情が見えることがある。既に、彼の物差しでは合わないものが、彼の周囲には次ぎつぎと生れて来ているのであつた。たとえば、仕事場の釜に焚く薪を買うように、女房に言いつける。女房のみつ——もちろん後妻である、齢も三十近くちがう、——は、すぐ由次郎の長女に相談する。相談することは別に差支えない。が、二、三日して運び込まれる薪を見ると、僅か二、三十束に過ぎないこともあつた。

「不景氣な買い方をするな！」

由次郎には、配給というものが、実感としてはどうしても受け取れない。薪というものはトラックで一ぱいずつ買うものだと思つている。ちよつと不機嫌な顔になり、ぼそりとひとこと言うとそのまま黙つてしまふ。

「はい。」

と、応える女房の背では、いいのよ、いいのよ、と、長女の紀和きわがそつと袂たもとをひいていゝる。由次郎も紀和には、この頃なんとなく氣圧されるのである。

三十年來の老舗といえ、揺らぎもしないはずだが、しかし時勢には勝てない。

「京染」という全く手工業的な家内工業が、敗戦と、それにつづくアメリカ風の横溢する中で、次第に圧迫されてゆくのは否定できなかった。それは夜更けの風が、遠く微かに唸りをあげるように、次第に彼らを締めつけて来ているようであつた。一九五〇年の春早々には、二百何十軒の業者が、半月に亘つて休業したことがある。勿論、税務署に対するジエスチュアもあつた。年末の繁忙期を過ぎて、一年じゆうで一番暇な季節にも当つていた。けれども、染料の昂騰と人件費の膨脹、それに「京染」の味など分ろうともしない若い人びとの氾濫によつて招かれた不安は、やはり隠しようもない。今から思えばまだ桁ちがいに安い、手描友禅の染代、一反一万円から二万円という相場では、注文も非常に少かつた。戦前からの取引先は多く逼迫しており、戦後のブルジョアはすでに無縁の人であつた。

由次郎の長男は、戦争で死んでしまつた。次女の美代は一年前に嫁いで行つた。いま「丸由」の一家は、由次郎夫婦と紀和、それにまだ二つになつたばかりの、みつの息子の彰だけである。以前は職人も二、三人は置いていたが、彼らも兵隊にとられて死んだり、帰つても転業してしまつたりして、戦後は一人もいない。由次郎自身が仕事場に立つて、釜に

染料を投げ込んだり、火加減を見たりする始末である。紀和は父親の助手の立場から、いつか立派な職人になつてしまつた。今では、老父の仕事を完全に凌ぐ。そればかりではない、近年、とかく出不精になつてしまつた由次郎の穴を埋めて、商売上でも思いがけない腕前を見せることがある。いい加減に婿でも迎えて、と言つてゐる内に、三十にも近くなつたが、婚期を逸した女の影は更になかつた。

急ぎの仕事を片附けて、忙しく仕事場を出て来ると、電話口で明るい笑い声をあげている。かと思うと、納戸に入つて手早く仕事着を脱いでいる。昨日、仕立て上つて届いたばかりの着物を、まだ皺一つない畳紙たたしから引き出すと、はらり、肩に羽織つて、

「お洒落するのや、あらへんのどすえ。」

四つより違わない継母にわらいかける。そんな時、肩の線はふと艶めいて、気づけば匂い立つかのようだ。

なるほど、出掛ければ得意先のお内儀が挨拶も忘れて、まあきれい、と眼を輝かす。

「お紀和さん、あんた染めはつたん？ いい色気……。」

その柄をと、注文が集まるころは、着物は簞笥に藏い込まれて、もう滅多に陽の目を見ない。渋いものも着たし、思い切つて派手なものも着た。粋な着物で歩けば、どこか名の

ある茶屋のお内儀にも見えた。

「何所のお内儀はんえ？」

立ち話をして別れる、そのすぐ背で、相手の連れが囁いているのを、耳にはさんだことも幾度かある。

2

二十坪の仕事場の石畳は、時雨しぐれの来る度に冷えて行つた。足の爪先から痺れるように寒くなる日も、もう程なくやつて来る。

紀和は、自動乾燥器の回転する音を聞きながら、壁の棚に並んだ何百という染料の容器に眼を晒していた。陶器の壺もある。錆びて、塵をかぶつた罐かんもある。硝子の小さな瓶は、竈かまどから落ちこむ午前の光を受けて仄ほかに光りながら、それぞれの染料の色を鮮かに浮き立たせていた。

赤もあつた。黄もあつた。海のような青もあれば、朽葉色の明るさもあつた。いや、どの系統に属する色も、僅かずつちがう何種類、何十種類を集めて、互いに弾き合うこともなく、逆に一種華麗な調和を保つていた。が、その中で唯ひとつ、赤蘇芳あかすわうか猩々きやうじやう緋ひか、離